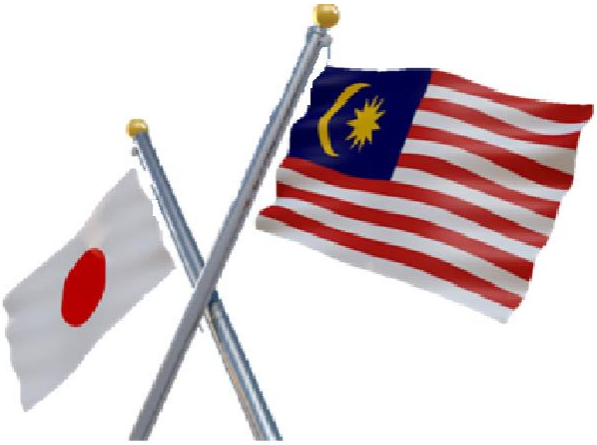
東京オリンピック・パラリンピック　ホストタウン事業

愛媛・マレーシア国際交流シンポジウム
～学んで食べて知ろうマレーシア～

報　告　書



2018 年 12 月 12 日（水）　場所：愛媛大学

（主催）マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会

（共催）愛媛大学国際連携推進機構

目　　次

愛媛・マレーシア国際交流シンポジウム　プログラム　……
2

＜第１部＞
（1）「マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会」の取組み … 3
　発表者：実行委員会会長　齊藤　直樹

（2）講演「日本人が選んだロングステイ希望国総合１位の国・マレーシア
　　（その歴史と現状、日本との関係）」 …… 6
　講　師：西田　重信 氏

（3）講演「これからの日馬友好関係　～我々ができること～」 …… 11
　講　師：シャズリンダ ・モハマド ・ユソフ 氏

（4）愛媛大学生によるディスカッション …… 14
　テーマ：「マレーシアの人に教えたい愛媛の魅力、愛媛の人に知って
　　もらいたいマレーシアの魅力」

＜第２部＞
　マレーシア料理試食・交流会　…… 18

＜資料＞
◆マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会の取組み…… 20

愛媛・マレーシア国際交流シンポジウム【プログラム】

日　時：平成 30 年 12 月 12 日（水）15：00～19：00
場　所：愛媛大学
テーマ：学んで食べて知ろうマレーシア
主　催：マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会
共　催：愛媛大学国際連携推進機構

〈第１部〉15：00 ～ 17：00
(1)「マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会」の取組み
　発表者：実行委員会会長　齊藤　直樹（愛媛県スポーツ・文化部スポーツ局長）

(2) 講演「日本人が選んだロングステイ希望国総合１位の国・マレーシア
　　（その歴史と現状、日本との関係）」
　講　師：（公社）　日本マレーシア協会 監事　西田　重信 氏

(3) 講演「これからの日馬友好関係　～我々ができること～」
　講　師：シャズリンダ モハマド ユソフ 氏（ICHIGO SERVICES 取締役）

(4) 愛媛大学生によるディスカッション
　参加者：マレーシア留学生、愛媛県学生
　テーマ：「マレーシアの人に教えたい愛媛の魅力、愛媛の人に知ってもらいたい
　　マレーシアの魅力」

＜第２部＞マレーシア料理試食・交流会（17：30～19：00）
　場　所：愛媛大学校友会館 1Ｆ フリーニ
　参加者：事前申し込み者

＜第１部＞

マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会の取組み

発表者：実行委員会会長　齊藤　直樹（愛媛県スポーツ・文化部スポーツ局長）

本日は、大変お忙しい中、「愛媛・マレーシア国際交流シンポジウム」にお越しいただきまして誠にありがとうございます。

今回のシンポジウムは、2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けたホストタウン事業として開催するもので、マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会が主催、愛媛大学国際連携推進機構の共催という形で開催させていただいております。

このマレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会の取組みについて、簡単に御説明したいと思います。

まず、「ホストタウン」についてですが、簡単に言うと、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、事前キャンプの誘致等を通じ、大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る自治体を「ホストタウン」として登録し、全国各地に広げる国の取組みです。なお、事前キャンプというのは、一般的に、大会開催前に、選手たちが開催国の気候や環境に身体を慣らし、コンディションを高める目的で行われるものです。

このホストタウンの推進を通じ、オリンピック・パラリンピックの開催効果を東京のみならず全国津々浦々まで波及させることが強く期待されています。

今年 10 月時点で、全国 340 の自治体が 107 の国・地域のホストタウンとして登録されております。

次に、県内の状況ですが、表にありますとおり、６つの国・地域に対して、県内の自治体が事前キャンプの誘致に取り組んでいるところであり、ホストタウンにも登録されております。
一番上のマレーシアにつきましては、愛媛県、松山市、砥部町がホストタウンに登録され、連携・協力してキャンプ受入れや交流事業を実施することとしております。
まだ、マレーシアのバドミントン以外、事前キャンプの実施が決定したものはありませんが、これらの取組みが成功すれば、来年、再来年には、多くの国から選手やスタッフたちが愛媛を訪れることになると期待しているところです。

次に、マレーシアのバドミントンチームの誘致についてご説明したいと思います。

そもそも、なぜマレーシアなのか、なぜバドミントンなのか、ということですが、マレーシアでは、バドミントンは国技と称されるほど盛んで、大変人気のあるスポーツです。競技力も高く、先のリオデジャネイロオリンピックでは、男子シングルスなど３つの種目で銀メダルを獲得しています。

愛媛県との交流のきっかけになったのは、2011 年から約５年間、愛媛県バドミントン協会がマレーシアからバドミントンコーチを招き、ジュニア選手等の育成に携わっていただいたことでした。このようなつながりと、高い競技力、将来的な交流の発展性などを考慮して、マレーシアのバドミントンチームの誘致を決定しました。

また、マレーシアの誘致に取り組むもう一つの狙いとして、経済交流発展への期待があります。今年、マレーシア首相に返り咲いたマハティール氏が、2015 年に愛媛県にお越しになり、柑橘や今治タオルを大変気に入っていただきました。

そうしたことが弾みとなり、マレーシアを県産品の海外販路開拓のターゲットとし、これまで２回、柑橘やタオルなどをＰＲする『愛媛フェア』を開催しました。それ以後も、継続的な取引を目指し、営業活動を実施しているところです。

このような中、愛媛県ではマレーシアバドミントン協会に積極的にアプローチしたところ、正式なキャンプ地として選んでいただき、今年７月にマレーシアにて基本合意書を調印することができました。

合意の内容ですが、「基本事項」としまして、今年と来年に、ジュニアとシニアのチームがそれぞれ年１回合宿することができ、2020 年には、オリンピック開催前に代表選手が愛媛県でトレーニングと調整を行うというものです。

愛媛県でのキャンプ実施における「ＢＡＭの責務」としては、練習の公開や県民との交流事業への参加、東京オリンピック後の交流継続などとし、受入を行う「愛媛県等の責務」としては、トレーニングに必要な施設確保やコンディショニングサポート等はもちろんですが、ＢＡＭからの要請により、ジュニア選手の合宿の際には、愛媛の学校における体験なども盛り込んでおります。

マレーシアとの交流計画ですが、ホストタウンとなっている愛媛県、松山市、砥部町においては、連携して事業ができるよう、関係する団体にも参画してもらい、「マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会」を設立し、今年から 2020 年のオリンピックまで、また、それ以降にもつながるような様々な交流を実施していく計画としております。

内容は、マレーシアの選手による「合宿」の受入れだけでなく、「住民との交流」の実施や、お互いの文化や食について理解を深め、東京大会に向け「機運を醸成」するとともに、県内はもちろん、マレーシアに対しても様々な「情報を発信」し、またそれを「経済交流」にもつなげていく計画とし、2020 年以降も、愛媛とマレーシアの交流が継続・拡大するよう取り組んでいきたいと考えております。

次に、今年８月、実際に選手たちが来県し、合宿を行った様子を簡単にご紹介します。
今年度の合宿は、国際大会のスケジュール等の影響で、シニアとジュニアの混成チームが８月 20 日から８月 27 日までの８日間、合宿を実施しました。選手らが来県した際には、松山空港に約 60 名の中学生のバドミントン部員が駆けつけ、盛大な歓迎セレモニーが行われました。

選手たちは、県総合運動公園体育館のコートでみっちり練習するとともに、陸上トラックやジムなども使って内容の濃いトレーニングを実施していました。

また、せっかくトップレベルの選手たちが合宿に訪れたことから、出来るだけ多くの県民が見

たり触れ合ったりできるよう、交流事業として、県内の選抜選手やヨネックスの実業団選手との親善試合や中高生のバドミントン部員を対象としたバドミントン教室を開催したところ、多くの方に参加いただき、大変盛り上がりました。

さらには、今年７月の豪雨災害で被災した南予地域の高校生もイベントに招待したところ、マレーシアの選手たちからは温かいエールが贈られ、相互の絆がより一層深められました。

トレーニングの合間には、県内の伝統文化の体験や道後温泉やしまなみ海道など、愛媛が誇る観光地を訪れるなど、愛媛の魅力を存分に味わっていただきました。

選手やコーチからは、今回の合宿が大変有意義で満足できる内容だったとの感想をいただきました。これら、合宿の詳細につきましては、県のホームページに報告書を掲載しておりますので、ご興味がある方は是非ご覧ください。

マレーシアとの交流事業の今後の予定ですが、来年、2019 年には、６月か 12 月のどちらかにシニア合宿、６月にジュニア合宿が実施される予定であり、７月には、東京で行われるジャパンオープンの応援事業なども検討しております。

2020 年のオリンピックの年には、開会直前となる７月にオリンピック出場選手が来県して調整することとなっており、オリンピックの試合においては、愛媛をあげてマレーシアチームを応援していきたいと考えております。

オリンピック後につきましては、先ほども申しましたように、マレーシアと愛媛の間で様々な形での交流が継続・拡大していくよう、道筋をつけていければと考えております。

以上、簡単ではございますが、マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会の取組状況の説明とさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

講演：「日本人が選んだロングステイ希望国総合１位の国・マレーシア」

講師：西田　重信 氏

【プロフィール】

公益社団法人　日本マレーシア協会　監事

元・三菱商事株式会社マレーシア総代表

兼クアラルンプール支店長

元・クアラルンプール日本人会会長・日本人学校理事長

元・三菱商事石油株式会社代表取締役社長

【講演内容】

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました西田です。

マレーシアについて、たくさんしゃべりたいと思いますが、時間が限られていますので、早速内容に入ります。

タイトルにある「日本人が選んだロングステイ希望国総合１位の国・マレーシア」ですが、これは、経済産業省の外郭団体であるロングステイ財団の調査で 2006 年から 2017 年まで 12 年連続でマレーシアが総合 1 位なんです。なぜかという理由を挙げますと、まずは、物価が安いということ。日本の大体３分の１から２分の１程度。それから、日本と比べても同じくらい治安が良いということがあります。また、日本からは約７時間で行くことができます。エアアジアという格安航空会社がありますが、実はマレーシアの航空会社なんです。病院も、日本語の通じる病院がクアラルンプール市内にあるので、安心して滞在できます。気温は、平均３０度前後ですから、日本の真夏のような暑さはなく、過ごしやすくなっています。そして、何といっても、国の政策として「ルックイースト政策」というのがあります。これは、マハティール氏が首相になって初めて提唱したものですが、マレーシアが植民地から独立し国を作り上げていくときに、欧米ではなく、日本をお手本にして近代化していこう、というものです。このため、対日感情は非常に良いです。

そして、もう一つのポイントは、英語がどこに行っても通じることです。もちろん、公用語としてマレー語はあるが、英語だけでどこに行っても問題なく過ごせます。また、日系企業がだいたい 1,700 社ほどあり、日本人も２万４千人くらいいます。例えば、大型小売業を行うイオンは、東南アジアでも展開しているが、その中心はマレーシアにあります。私の友人のイオン・リテールの社長に聞きますと、マレーシアだけで、117 店舗のイオンの店があるということです。これ以外に、伊勢丹を含めてデパートが４カ所、後は、セブンイレブン、ユニクロ、ココイチ、ワタミ、大戸屋、こういった企業も進出していますから、日本食の心配もありません。ゴルフ場は、アジアで２番目に古いゴルフ場もマレーシアにあります。そして、何といっても、マレーシア・マイ・セカンドホーム（MM2H）という国の政策として、一定の経済規模があると証明すれば、何と、10 年間の滞在ビザが出ます。しかも、滞在ビザだけではなくて、出国入国自由で銀行口座も開設できます。もちろん、10 年というのは延長もできます。こういった理由から、マレーシアが第１位になっているのです。ちなみに、第２位はタイですが、点数差は倍近くあります。

国というものを理解するためには、民族、国籍、文化、言語、宗教などいろいろなファクターを知って、初めてその国を知ることができます。また、その国の地理や歴史というものが深く関係してきます。

マレーシアは、マレー系、中華系、インド系の３つの民族が一緒に住んでいる多民族国家と言われています。どうして３民族が一緒に住んでいるかというと、昔は、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、インドネシアは一つの国だったんです。どうして４つに分かれたのか。そして、先ほどお話ししたように、英語が共通語になっています。どうしてでしょうか。また、なぜイスラム教が国教となったのか、などを知るためには、地理と歴史を理解する必要があります。

地理についてですが、世界の６大陸のうち一番大きなユーラシア大陸の西の端はポルトガル、北の端、東の端はロシアにありますが、南の端は、実はマレーシアなんです。

マレーシアの面積は日本の約９割、人口が日本の約４分の１くらいです。また、マレーシアの国土は、大きくはマレー半島とボルネオ島の北部の２つの地域からなりますが、マレー半島（半島マレーシアと呼んでいます。）には 11 の州があり、ボルネオ島北部(東マレーシア)には２つの州があり、合わせて 13 の州から成り立っています。半島マレーシアと東マレーシアでは、かなり雰囲気も違います。学生の方だと、タイやシンガポールにはよくいかれるんですが、マレーシアを一言で表現すると、丁度、タイとシンガポールの中間だと思っていいと思います。地理的にもそうですが、シンガポールは大変きれいですが、ちょっと冷たいよね、台所で言うとピカピカのステンレスのシンクみたい、という印象だと思います。反対に、タイは、人は良いけれども、何となく汚いイメージ、「かまど」のよう、と例えるとわかりやすいと思いますが、マレーシアはその丁度中間、程よくきれいで程よく汚い、程よくしっかりしていて程よく人情味がある、ということで、日本人のセンスからすると、大変住みやすいところだと思います。

また、地理のポイントとして、地政学上非常に重要なのがマレー半島とインドネシアのスマトラ島の間にあるマラッカ海峡の存在です。これは、貿易の通路となっており、マレーシアの現在の姿を形成する上で、様々なこと繋がってくるのです。

それを理解するには、歴史を知る必要があります。

マレーシアには、日本よりもはるか昔、100～180 万年前から「ジャワ原人」と呼ばれる人類が住んでいた遺跡があります。紀元前・後に話は飛びますが、マラッカ海峡の中心部「マラッカ」は、海洋貿易の中心でした。西はエジプト・中東・インドから、東は中国に至る交易は、季節風の影響もありますが、全てマラッカを経由する要衝ということで栄えました。４から５世紀ごろ、交易の影響で、まずインドから仏教やヒンドゥー教がわたってきました。その後、12 世紀にはイスラム教が東南アジアに伝播し、同時に、アラビア文字が入ってきます。それまでは、マレーシアには文字が無く、歴史が残っていませんでしたが、ここで文字が入ってきたということは非常に意味があります。

1400 年には、マレーシアで初めて、マレー人による独立した国家である「マラッカ王国」が誕生し、当時、広まっていたイスラム教を国教と定め、以来、ずっとイスラム教が国教となっています。

マラッカ王国ができた 100 年後くらいにポルトガルの侵攻を受けて植民地となり、その 130 年後にはオランダの植民地、その 150 年後にイギリスの植民地となります。その後、太平洋戦争時

には、日本が占領し植民地にしますが、終戦後、再びイギリスの植民地となります。その後、1957年にようやく半島マレーシアが「マラヤ連邦」として独立しました。その後、1963年にはシンガポール、東マレーシア（サバ州、サラワク州）が加盟し、マレーシアが成立しました。この時、ボルネオだけは石油の油田が発見されたことから、独自の国家として独立しました。その２年後の1965年に、シンガポールが分離・独立し、現在のマレーシアのかたちとなります。トータルで450 年間ほどヨーロッパの植民地であった、ということが、今のマレーシアに非常に大きな影響を与えています。

言語の歴史で言うと、マレーシアとインドネシアはもともとひとつでマレー語という同一の言語を話していましたが､1824年にイギリスとオランダが英欄協定を結び､マラッカ海峡を挟んで、東側のマレー半島をイギリス領、西及び南側の島しょ部をオランダ領に分けました。このため、マレーシアでは英語が話され、インドネシアではオランダ語が話されたことから、その名残りから、マレーシアでは英語が通用し、インドネシアでは通用しないという格差が生まれ、今に至っています。

それでは、マレーシアについて本論に入ります。

マレーシアは、多民族国家と言われていますが、同じ多民族国家であるアメリカは「人種のるつぼ」であるのに対し、マレーシアは「人種のサラダ・ボール」と言われています。アメリカでは、様々な人種、文化、宗教があるものの、それらが混然一体となってまじりあっていますが、マレーシアではまじりあわずに共存しています。

日本人は、民族・国籍・言語は同一のものという認識をしがちですが、マレーシアでは“マレーシア国籍のマレー人“、“マレーシア国籍の中国人”、“マレーシア国籍のインド人”という形で３つの民族が共存しています。人口比率は、マレー系が一番多く６～７割、宗教はほとんどがイスラム教、話す言葉はマレー語です。中華系は２～３割で、宗教が仏教かキリスト教、言語は中国語です。インド系は１割弱で、ヒンズー教を信仰し、ヒンディー語を話します。マレーシアでは、３つの民族がそれぞれの宗教、言語、民族文化を維持しながら融和して共存しているのです。これが「サラダ・ボール」と例えられ、入れる器が「国」であり、潤滑油となっている共通言語としての英語がドレッシングに例えられます。

元々マレーシアには、マレー系民族と先住民族だけでしたが、イギリスの植民地となった19世紀に、「錫（スズ)」と「ゴム」という２つの産業が興りました。この新しい産業のために不足する労働力を補うため、錫の採掘業者として、中国の福建省や広東省から、ゴムのプランテーションの労働力として、インドの南、タミール地方から、それぞれ労働者が半ば強制的に奴隷として移住させられ、それが国民として残りました。

民族の特性としまして、マレー系の方は公務員や軍人、また、歌や踊りが好きなのでエンターテイメントに携わる方が多いです。中国系は、想像どおり、金儲けがうまく、商売人、銀行員、企業経営をしている人が多いです。インド系は、弁が立ちますので、弁護士や医者などの専門職に就く人が多いです。

マレーシアの休日ですが、年16日ありますが、イスラム教、ヒンズー教、仏教、キリスト教のそれぞれの祭日が認められています。

また、マレーシアからのお客さんをお迎えするときに気を付けておく必要があることがあります。マレーシアには、イギリスの影響もあり、爵位があります。種類は３つで、ツン、タンスリ、

ダトーと言います。この爵位をもらった人には、必ず、名前の前に爵位を付けて呼ばなければなりませんので気を付けてください。

次に、政治の話をします。

マレーシアは、日本と同じ立憲君主制で国王がいます。ただ、面白いのは、13 の州のうち、９つの州に王様がいますが、その州の王様が５年ごとに順番に国王になるのです。45 年に一度国王になる順番が回ってくるわけですが、実権は持っていません。実権をもっているのは、上院、下院のある連邦議会で、下院で選ばれた首相になります。

22 年間首相を務めたマハティール氏が 2003 年に退任し、マハティール氏の側近だったナジブ氏が首相になっていたんですが、金権体質などの問題があり、恩師であったはずのマハティール氏が野党となってナジブ政権を批判し、今年５月に総選挙があったんですが、マハティール氏が勝ち、首相に返り咲きました。マハティール首相は現在 93 歳ですが、２年間しかやらないと言っています。２年後にナンバー２のアンワル氏に首相を譲ると言っています。

マレーシアの基本政策で主要なものが３つあります。

まず、ブミプトラ政策ですが、これは、人種差別政策です。ただし、南アフリカやアメリカであった人種差別とは逆で、経済力等に優れた中国系、インド系との格差を縮小させるため、マレー人を少し優遇するための政策で、人口比率であるマレー系６割、中国系３割、インド系１割という比率を様々な場面で適用するというものです。内閣の構成比率なども、概ねこれによって決まっています。会社の社員も、この比率で雇わなくてはならない、昇進などもこの比率に従わなくてはならない、などです。これのおかげで、マレーシアでは、人種を理由とする暴動は起こっていません。

次に、VISION2020（ワワサン 2020）ですが、これは、2020 年に先進国の仲間入りをしようという目標です。当初、国民１人当たりの GDP が１万ドルを超えることを目標としていましたが、実は、2012 年に既に１万ドルを超えたので、嵩上して１万５千ドルを目標にしています。

次に、ルック・イースト政策ですが、1981 年にマハティール氏が首相になった時、宗主国であったイギリスやアメリカではなく、日本をお手本にしよう、というものです。日本の勤勉さや道徳、教育といったものを学ぼう、という政策です。そのおかげで、１万５千人の学生が公費で日本に留学に来ました。私費留学を含めると、およそ２万５千人くらいが日本に留学しています。

経済についてですが、１リンギットが約 27 円ですが、昔は、マレーシアは錫とゴムが主要であり、その後、石油とガスが主となったが、今現在は、実は製造業がベースとなっていて、家電や電子部品、それから金融や保険のサービス業もどんどん増えています。

ひとつここで宣伝をしますが、2011 年に 3.11 の地震があり日本のすべての原発が停止したのですが、日本の電力の３割を占めるこの電気は、クリーンエネルギーと言われる LNG（液化天然ガス）による発電で補いました。この時に LNG の輸入に一番協力してくれたのがマレーシアです。2011 年の日本への LNG 供給量の２割をマレーシアが占め、第１位となっています。これに日本はかなり助けられました。

日本との接点についてご説明します。

戦国時代さかのぼりますが、種子島にポルトガル銃が伝来しましたが、これはマラッカから来

たものでした。同じように、フランシスコ・ザビエルもマラッカを経由して日本に来ました。

太平洋戦争時、1941 年 12 月 8 日の日本の海軍がハワイの真珠湾攻撃した同じ日、真珠湾攻撃の１時間前に、日本陸軍はマレー半島北端コタバルにパラシュート部隊が上陸し、僅か 55 日間で 1100 キロを自転車を使った銀輪部隊で進軍し、シンガポールを占領しました。そして、1945 年までの４年間、植民地として占領していました。

近代においては、マハティール首相時代、「マルチメディア・スーパー・コリドー」プロジェクトによりマルチメディア国家を目指して都市開発を行いましたが、これは、日本の大前研一氏の提言に基づくものでした。また、マレーシアのシンボルともなっているツインタワーはハザマを中心とする日本コンソーシアムが建設し、KLIA と言われるマレーシアの新空港は黒川紀章氏が設計したものです。このように、日本の企業がいろいろな形で貢献しています。

非常に駆け足でしたが、以上で終わります。
ご清聴ありがとうございました。

講演：「これからの日馬友好関係　～我々ができること～」

講師：シャズリンダ・モハマド・ユソフ 氏

【プロフィール】

マレーシア、マラッカ出身
1996～2000 年 九州大学工学部電気情報工学科
2000～2006 年 アルプス電気（ﾏﾚｰｼｱ）R&D エンジニア
2006～2008 年 九州大学ビジネススクール（QBS）修士
2008～2018 年 マレーシア国民大学（UKM）講師
2018 年～ ICHIGO SERVICES 取締役
※ムスリムツアーを中心に企画やガイドサービスを提供

【講演内容】

皆さんこんにちは。

マレーシアから来ましたシャズリンダと申します。

講演タイトルは「これからの日馬友好関係～我々ができること～」ですけれども、私からのメッセージは、スライドにある「国際理解への道～きっかけを大切に～」です。

私は、実は 23 年前に愛媛大学を志望しましたが、結局は九州大学の方に進学することになりました。そこで、マレーシア市民の会、内浜公民館、福岡マレーシア友好協会の方々と出会いました。そこから、マレーシア市民の会と内浜公民館の方には、ずっと長い間お世話になっています。

1995 年にユニバーシアード（大学のオリンピック）が福岡県で開催された際、内浜地区がマレーシア団体のホストファミリーとなり応援したことがきっかけとなり、翌年の 1996 年から、マレーシアとの交流を深めるために様々なイベントを行い始めました。

これは、東京オリンピックに向け、愛媛県がマレーシアのホストタウンとなり、バドミントンの選手団を受け入れるのに状況は非常に似ていると思います。

私が九州大学に入学したのがちょうど 1996 年でしたが、内浜公民館の方々がマレーシア留学生の歓迎会を開いていただいたり、成人の日には着付けを行っていただいたりしました。また、毎年５月３日には、博多どんたくという祭りが催されますが、その際にも、内浜公民館、マレーシア市民の会、マレーシア友好協会の方々と一緒に参加させていただいたり、内浜小学校の運動会にもマレーシア人として参加させていただいたりしましたが、これは、今でも続いておりまして、私も、福岡を訪れるタイミングが合えば参加させていただいています。そのお礼として、マレーシア人留学生の断食明けのイードパーティの時に、日本人の皆さんを招待してマレーシア料理を一緒に食べるなどの交流も行っています。

なぜ、きっかけを大切にいないといけないのか、ということについて話したいと思います。

トゥン・ドクター・マハティールがマレーシアの首相に就任した時の演説で、「マレーシアは、ビジネス競争力を高めるために、ルック・イースト政策を活性化させ、日本との協力を深めていく方針である」と話しています。実は、私も、第１次のルック・イースト政策により日本に留学に来た１人なんです。さらに、「教育、育成や投資の分野で緊密に協力してお互いに利益を得る関係にしていきたい」とも語り、現在、それらの分野での交流事業の検討が進んでいます。

マレーシアと日本の自治体が取り組んでいる国際交流の例を紹介します。

鹿児島県日置市では、旧吹上町の「からいも交流」というプログラムをきっかけにマレーシアとの交流が始まり、2001 年には吹上町マレーシア交流実行委員会が設立され、2010 年にスランコール州スバンジャヤ市と友好都市協定を締結しました。また、その延長として、CLAIR（自治体国際化協会）のＪＥＴプログラムを活用して、マレーシアから国際交流員を受け入れており、現在、２人目の交流員を受け入れています。

もう一つの例ですが、北海道帯広市では、2016 年に帯広商工会議所で、JICA（国際協力機構）の草の根技術協力事業「フードバレー十勝を通じた地域ブランドとハラール対応産業活性化及び中小企業振興プロジェクト」を実施する中で、ケダ州のシティアズミラ氏を国際ビジネス推進員として採用しました。彼女は、私の同級生なので、色々な話を聞くことができました。
その事業の一環で、2015 年に「とかち製菓」とケダ州の「アンバンドロンガン社」との間でハラール認証を受けた大福の委託製造の覚書が取り交わされました。それにより、共同商品開発のためにマレーシアへの派遣や技術者の受入れが行われ、2018 年からマレーシアのイオンでハラール認証された豆大福が発売されることになりました。ハラール認証マークを見るだけで、イスラム教徒が食べることができると認識され、購入されやすくなるが、逆に、マークが無ければ、どういう食材が使われているか、購入する側が詳しく確認する必要があるため、認証マークを付ける、というのは非常に重要なことです。

こういった事例を踏まえ、これから何ができるかということですけれども、例えば、十勝では、我々の会社は、ムスリムツアーを企画し、十勝とマレーシアとの交流をサポートしています。昨年１０月と今年の７月の２回、十勝へのムスリムツアーを企画しましたが、地元の新聞にも取り上げていただきました。

また、来年２月末頃から、エアアジアが福岡とマレーシア間を就航することになり、福岡へのムスリムツアーも企画したいと考えており、福岡の関係者と協議を行っているところです。例えば、イスラム教徒の方が日本を訪れる際、どのような対応が必要になるか、などを福岡マレーシア協会の方々と協議しています。

また、2019 年には、マレーシアのヌグリ・スンビラン州のチーフミニスターが愛媛県との経済的な交流に興味を示しておりまして、２月にも愛媛県を訪問する予定を立てていると伺っておりますし、４月にマレーシア国民大学から１５名程の学生団が新居浜市を訪問する計画が決定しています。さらには、７月中旬にマレーシア国民大学の学生１０名程が愛媛県を訪れ、文化交流やホームステイを行う計画もあります。

このように、我々の会社では、EDUKAIZEN プログラム（マレーシアから、教員や教育に興味がある方を日本に連れてきて、大学や幼稚園などを視察してもらい、マレーシアに持ち帰って改善を図るもの）を進めておりますが、これを愛媛県にも拡大させていきたいと考えています。これらを推進するため、愛媛県にも、地域の国際交流センターのようなものが立ち上がればありがたいと思っています。EDUKAIZEN プログラムは、既に東京、埼玉、千葉、静岡、大阪、福岡で実施していますが、次は、愛媛県で実施できればと思っています。

たくさんの国際交流は相互理解をしていく上で非常に大切なことだと思っておりますので、一

つ一つのきっかけを大切に、交流を発展させていくことができればと考えます。西田先生がおっしゃったとおり、マレーシアが日本から学ぶことはもちろんたくさんありますが、日本がマレーシアから学べることもたくさんあると思います。日本から学べることは、労働倫理であったり技術的なことがあると思いますし、マレーシアから学べることは、多様な人種、文化が共存するダイバーシティのあり方や特に学生などグローバル化する上での流儀（マナー）を身につけることができるのではないかと思います。

以上です。ご清聴、ありがとうございました。

【質疑応答】

Q：シャズリンダ氏は、当初、愛媛大学を志望され、九州大学に留学されたとのことですが、なぜ、西日本を選ばれたのですか。

A：私は、田舎が好きなので。入試の日程の関係で、結局、担任の先生の勧めで九州大学を受験することになりました。福岡も良いところでした。

Q：来年から、愛媛での事業展開も検討されているとのことでしたが、愛媛ならではの魅力など、愛媛に期待することがあれば教えてください。

A：マレーシア人にとっては、日本と言えば、東京、大阪、北海道、来年には福岡も入るかもしれませんが、要するに、エアアジア（マレーシアの LCC）がどこに飛ぶかによるんですけれども。これら東京、大阪など大都市に行ったマレーシア人たちが、次はどこに行こうか、となった時に、日本の田舎として提案したいと思っています。愛媛県には、新居浜を良く訪れるんですが、それは濵中さん（新居浜でムスリムのためのモスクを開設）がいらっしゃって、ムスリムを連れていきやすい環境があることや自然が豊富であること。しまなみ海道も行きましたが、とても素晴らしかったです。来年は、できれば農家へのホームステイを企画したいと思っており、マレーシアの学生に良い経験になるのではないかと期待しています。

愛媛大学生によるディスカッション

テーマ:「マレーシアの人に教えたい愛媛の魅力、愛媛の人に知ってもらいたいマレーシアの魅力」

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント科　山中　亮　准教授

パネリスト：

①理工学研究科電子情報工学専攻（大学院）2 回生　ｲﾙﾌｧﾝ ﾀﾞﾆｴﾙ ﾋﾞﾝ ﾑﾊﾏﾄﾞ ﾗﾃﾞｨｰさん

②工学部電気電子工学科 4 回生　ﾑﾊﾏﾄﾞ ｼｬｰ ﾍﾙﾐ ﾋﾞﾝ ｻﾊﾙｯﾃﾞｨﾝさん

③工学部情報工学科 2 回生　ﾑﾊﾏﾄﾞ ｼｬﾐ ﾋﾞﾝ ﾛｽﾗﾝさん

④社会共創学部 3 回生　白方　大海（ｼﾗｶﾀ ﾋﾛﾄﾐ）さん

⑤法文学部 1 回生　東　怜奈（ｱｽﾞﾏ ﾚｲﾅ）さん

【内容】

（山中准教授）

私は、マレーシアには３年前くらいから何度か渡航する機会があり、様々な関わりを持たせていただいているということもあり、今回、コーディネーターを務めさせていただく。留学生や日本側の学生にざっくばらんに話を聞いていきたい。

それでは、パネリストの皆さんには、自己紹介を兼ねて、マレーシア留学生にはマレーシアの紹介や日本に来た時の感想、またスポーツへの関わりなどについてお話しいただきたい。

（イルファンさん）

私は、愛媛大学に３回生の時に編入してきて、現在博士課程２年生であり、松山在住は４年目である。来年度からは、茨城県で働くことが決まっている。私がマレーシアで住んでいるのは、クアラルンプールとＫＬ空港の中間地点にあるプトラジャヤという場所。プトラジャヤは、アメ

リカで言うとワシントンのような地区で、政府機関が集まり、首相のオフィスもある。例年、独立記念日の祝賀行事はクアラルンプールで開催されているが、今年はプトラジャヤで開催された。

私が愛媛に滞在した４年間、様々なイベントに参加し、愛媛への理解を深めることができた。例えば、伊勢丹クアラルンプールで開催された第１回愛媛フェアに参加し、日本人の学生とマレーシア留学生が一緒に愛媛の商品の説明を行い、販売を行った。そのために、今治タオルなど愛媛の商品のことをいろいろ勉強した。また、県の事業でマレーシア人の人気ブロガーを愛媛に招へいした際、通訳として関わり、道後温泉を案内したり、宇和島で民泊などを紹介した。

（シャーさん）

私の出身は、クアラルンプールの近郊のヌグリ・スンビラン州である。住んでいる街は、プトラジャヤほど大きくはないが、住みやすくて、自分としては愛媛に似ているのではと思っている。愛媛は、大都会でも田舎でもなく、適度な大きさの街で、住みやすく勉強するにはとても適した環境があり、好きである。私は、運動が好きなので、幼い時からバドミントンやバスケットボールをしてきた。愛媛に来ても、毎週金曜日にバスケットをしている。

（ムハマドさん）

私の出身は、トレンガヌ州であり、南国情緒あるトロピカルなイメージの場所である。来年の３月で、日本に来て２年になる。日本での感想は、礼儀の文化がマレーシアと違うということ。日本は、マレーシアに比べて礼儀を重んじることから、最初は戸惑いがあった。スポーツについて言うと、高校生の時に２年間ソフトボールをやっており、州の代表にもなった。もちろん、バドミントンも好きなので、来年マレーシア選手団が愛媛で合宿をするのを楽しみにしている。

（山中准教授）

マレーシアでソフトボールをやっている人は多いか。

（ムハマドさん）

競技人口は少ない。

（白方さん）

私は、出身は地元愛媛県砥部町。これまで、長期休暇を活かして５~６か国を訪問したことがある。マレーシアには、昨年渡航し、東南アジア競技大会（SEA GAMES 2017）のボランティアとして参加しながら２~３週間ほど滞在した。そこで感じたのは、まさにダイバーシティ（多様性）ということであり、例えば、食や宗教など多様な文化が入り混じって人々の営みが形成されており大変興味深いということ。

（東さん）

私は、まだ海外に行ったことがないが、行ったことがない人の視点から考え、意見が出せればと思い今回参加した。私の地元も愛媛の砥部町なので、マレーシアのバドミントン選手が合宿をしたということで大変親近感が湧いている。マレーシアの方、海外の方にもっと砥部町の良いところ、砥部焼などのことを知ってもらい、訪れてもらえるきっかけになればと思っている。

（山中准教授）

東さんは、まだ海外に行ったことがないとのことだが、これまでの講演や留学生の話を聞いて、興味は湧いたか。

（東さん）

とても興味が湧き、行ってみたいと思った。

（山中准教授）
留学生の皆さん、もし東さんがマレーシアに行くとしたら、どこを勧めるか。
（イルファンさん）
初めてのマレーシアであればクアラルンプール付近の観光地やアトラクションを案内したい。
（シャーさん）
私は、歴史のあるマラッカの街を案内したい。また、自然が豊かなランカウイ島やボルネオ島にあるオラウータンの森なども良い。
（ムハマドさん）
私は、ベナン州をお勧めする。日本人が多く、日本語を話せる人も多い。代表的な「チャークイティオ（かき混ぜて炒めた紐状の米餅）」など食文化がかなり面白いので是非行ってもらいたい。
（東さん）
写真で見たマレーシア料理は、どれもおいしそうで、食べてみたいと思った。
（山中准教授）
話は変わるが、普段から日本人の学生と留学生が話をする機会はあるか。
（白方さん）
今回のシンポジウムで初めてマレーシアの留学生の方と話をした。普段は、このように話をする機会はそれほどない。
（イルファンさん）
研究室の仲間とは話したり出かけたりしているが、それ以外の日本人の学生と話す機会はあまりない。
（山中准教授）
研究室や学部を超えて交流する機会はあまりないとのことであるが、やはり交流する機会を増やし、きっかけが生まれることが大事。白方さんは、昨年、マレーシアで SEA PARA GAMES にボランティアとして参加されたが、その時のことを少し詳しく話してほしい。
（白方さん）
その国の人とつながるということがとても大事だと思っていて、ボランティア会場で知り合ったマレーシアの大学生の方と、今でもインスタグラムや FaceBook で「いいね」を押し合ったり、「今何をしている」という近況報告をしたりとコミュニケーションが続いている。そうした中で、「今、マレーシアはどうなっているのだろう」「日本の良いところを教える時にどう教えたらよいのだろう」ということを考えるきっかけになった。このため、来てもらって何をするのか、ということよりも、まずは自分がきっかけを作っていくということが大事なことだと思った。
（山中准教授）
ボランティアはどのような活動を行ったのか。
（白方さん）
主に各スポーツの準備・設営・運営や選手の移動時のサポートを行った。また、最終日には、他のボランティアメンバーとチームを組んでマラソンに参加したりもした。その人たちとは、今でも SNS 等で繋がっている。

（山中准教授）
スポーツであれ何であれ、ちょっとしたきっかけで人と人がつながることが非常に大事。日本

では、来年 2019 年にはラグビーワールドカップ、2020 年に東京オリンピック・パラリンピック、2021 年には関西ワールドマスターズが開催され、スポーツ以外の国際的なイベントもたくさん開催される予定であり、愛媛県でも、マレーシア代表のトップレベルのバドミントン選手が事前合宿に訪れることになっている。

このように、マレーシアの選手や関係者が来県した時に、どのような交流を期待するか。

（イルファンさん）

もし、タイミングが良ければ、愛媛の祭りを見てもらうなどの文化的な体験、交流などもあればよいと思う。また、同時にマレーシアの文化についても教えてもらえれば、相互の理解促進につながる。

（シャーさん）

私は、温泉を勧めたい。愛媛の温泉に入ったことがあるが、とても気持ちよかった。寒い時にもとても温まる。

（白方さん）

マレーシア人にとって、温泉はハードルが高いかもしれないが、足湯だったら気軽に体験できるので、お勧めしたい。

（ムハマドさん）

マレーシア人が愛媛を訪れる際、イスラム教の礼拝やハラルフードなどへの対応があれば滞在しやすいと思う。

また、愛媛のかんきつや温泉について、他県産地との違いを明確に打ち出せば、魅力がもっと伝わるのではないか。

（山中准教授）

今後、愛媛とマレーシアが様々な機会を捉えて交流を拡大していくためにも、お互いに興味を持ち、理解を深めあっていくことが重要だと思う。

そういう意味で、今日のシンポジウムは大変良い機会になったと思う。今後の交流の発展に期待したい。

＜第２部＞

マレーシア料理試食　・交流会

【次第】

1　開会挨拶：マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会
　　事務局長　客本　宗嗣（愛媛県スポーツ･文化部スポーツ局地域スポーツ課長）

2　料理の説明：アジアン・ラサ・キッチン　田中　正弘　氏

3　乾　　杯：留学生代表　イルファン ダニエル ビン ムハマド ラディーさん

4　歓　　談

5　閉会挨拶：愛媛県バドミント協会常務理事　濵中　彰　氏

【マレーシア料理（アジアン・ラサ・キッチン提供)】

①NASI LEMAK ナシレマ（ココナッツミルクで炊いたご飯）
②KARI AYAM マレーシアチキンカレー
③DALCA SAYUR 野菜カレー
④SAMBAL サンバル
⑤BOH TEA ボーティ
⑥INDONESIA KOROKE インドネシア風コロッケ
⑦IKAN MASAM MANIS PEDAS　揚げ魚の料理
⑧KUIH TALAM クイタラム

【交流会の様子】

＜資料編＞

マレーシア・バドミントンチームえひめキャンプ実行委員会の取組み

県内の事前キャンプ誘致の取組状況

自治体	相手国・地域	受入競技
愛媛県・松山市・砥部町	マレーシア	バドミントン
愛媛県・松山市	台湾	野球・競泳・自転車・空手など
愛媛県・松山市等	モザンビーク共和国	柔道・陸上・ボクシングなど
西条市・愛媛県	オーストリア共和国	スポーツクライミング
新居浜市・愛媛県	サウジアラビア王国	ウェイトリフティング
今治市	パナマ共和国	競技未定

3

マレーシア・バドミントンチームの誘致

＊ なぜマレーシア？なぜバドミントン？

・マレーシアは、バドミントンは国技と称されるほど盛んで、競技力も高く、先のリオ五輪では、男子シングルス、男子ダブルス、混合ダブルスの3つの種目で銀メダルを獲得。
・2011年から約5年間、愛媛県バドミントン協会がマレーシアからコーチを招き、県内のジュニア選手等の育成に携わっていただくなど、バドミントンを通じたつながりがあった。
・高い競技力やこれまでの繋がり、将来的な交流の発展性等を考慮し、誘致を決定。

＊ 経済交流発展の期待

・2015年に、現マレーシア首相のマハティール氏が来県され、県内を視察して柑橘や今治タオルを気に入っていただいた。
・2016年、2017年の2回、柑橘やタオルなどをPRする『愛媛フェア』を首都クアラルンプールで開催。
・以後、継続的な取引きを目指し、営業活動を実施している。

4

マレーシアバドミントン協会（ＢＡＭ）との合意書調印（2018年7月）

（基本合意書の内容）

A. 基本事項

- BAMは、2018年及び2019年に、シニア選手及びU18ジュニア選手の合宿を、 それぞれ年1回、愛媛県で実施することができる。
- 2020年の東京2020大会の前に、オリンピック出場選手の合宿を愛媛県で実施する。

B. BAMの責務

1. 練習の公開　2. 愛媛県民との交流　3. 東京2020大会終了後の愛媛県訪問
4. 東京2020大会後の交流

C. 愛媛県等の責務

1. トレーニング施設等の確保　2. コンディショニング管理体制の構築
3. 選手団の宿泊施設の確保及び食事の提供　4. 通訳兼連絡係の配備等
5. U18ジュニア選手の学校授業体験

5

マレーシアとの交流計画（ホストタウン事業）

6

＊2018年合宿の実施概要

日程：8月２０日（月）～8月２７日（月）
メンバー：プレイヤー１８名（男子9名、女子9名） コーチ４名 フィジオ１名

空港での歓迎セレモニー

歓迎レセプション

7

＊2018年合宿の実施概要（トレーニング）

コートトレーニング

トラックトレーニング

ジムトレーニング

8

＊2018年合宿の実施概要（交流事業）

愛媛選抜や実業団選手との親善試合　　中村知事とビビアン・ワー選手

中高生対象のバドミントン教室

７月豪雨で被災した周予の高校生への応援色紙贈呈

＊2018年合宿の実施概要（文化体験・観光）

砥部焼絵付け体験

道後温泉↑

坊っちゃん列車
←

しまなみサイクリング　→

今後の予定

＊ **2019年**
・シニア合宿（６月か１２月）
・ジュニア合宿（６月）
・ジャパンオープン応援事業（７月）

＊ **2020年**
・オリンピック直前の代表選手合宿（７月）
・オリンピックの応援（パブリックビューイングなど）

＊ **2020年以降**
・ジュニア選手同士の相互交流継続
・民間ベースのスポーツ・文化交流の促進
・県内企業のマレーシアへの販路拡大の推進

11

ご清聴ありがとうございました。

12